

後立山しくじり登行記

経二 近藤 節夫

九月一日、二十二時四十五分、福知城勇をリーダーに廣瀬明夫、伊藤嘉信、小生のカルテットは念願の後立山縦走を完遂すべくネオン瞬く新宿をあとにした。

揃いも揃って猛者、豪傑揃いの中にあつて、何となく奥床しさと品の良さを感じさせるのは、小生ただ一人だった。

登行スケジュールは四泊五日にスペアを一日取って、第一日は白馬に天張る予定だ。

二日朝、信濃四谷着、快晴。

台風シーズンであるにも関わらず、雨の心配はまずなさそうだ。バスで猿倉まで来る。

朝食、キジ撃ち。猿倉荘にいた登山者もすべて白馬目指して登って行った。我々四人組だけがガランとした建物の中に取り残される。

秋の空はあくまで青く澄み渡っている。ところどころ綿をちぎったようなちぎれ雲が浮いている。大きく深呼吸、「ヨーシ、しゅっぱーっ、ローリン、ローリン、ローリン……」(TV映画「ローハイド」主題曲より)

まだ残暑が厳しく日差しが強い。大きなザックを背負った薄汚い男たちが、ゆっくりゆっくりジグザグ道を登り始める。十五分も歩くと身体中汗びっしょり、加うるに合宿以来一ヶ月半ぶりの登行なので余計疲れる。喉もすぐからからになるが、がまんする。三十分も歩くともう足の方がよるめき出して足元があやしくなってくる。ところが、ばてているのは小生ばかりではない。空元気を出しているものの、他の三人ともヒーヒーあえいている。一時間ばかり登って漸く大雪溪の出会いに着く。ここで一息。いよいよ雪溪を登る。

この頃から雲行きがあやしくなり、上空は暗雲が低くたれこめ、雪溪の上の方にはガスがかかり、かすんで上の景色はまったく見えない。トップの伊藤がステップを切り、後に続く三人は、ただ足元を見つめながら歩一歩と前進する。

ガスの中に入ると視界がきかなくなる。上の方から吹き下ろしてくる風がいやに冷たく、思わず身震いする。雨の心配はしていなかったのだが、どうやら一雨やっつきそうな気配だ。ヤツケを着て、ただ黙々と登る。時たま雲が切れて青空が現れるが、また直ぐ雲が隠して我々をがっかりさせる。名にし負う白馬大雪溪だが、九月ともなればあちこちに大きなクレバスが口をあけていて我々をギョッとさせる。薄明かりでガスがかかっている。登行条件としては最低だ。そのために最初の元気はどこへやら、自然足も鈍り、口も重くなる。いつも無口の小生は別として、絶えず嗩声、

嬌声を張り上げている他の三人にしてからが、シュンとしている。

それでも第一日は予定通り白馬山荘下にテントを張ることができたのは、格好のライバルがいたからだ。我々のテント地からは、杓子、白馬鑓も目の前にある。周囲にはきれいな高山植物が、疲れたわれわれを癒してくれる。他に三つのパーティのテントが張ってあった。冷気がはだにひんやりと感じられる。静かに山の日が暮れてゆく。

明けて三日、既に隣のパーティは出発した後だった。

昨日、買い込んでおいた残りのマキを背負ったので、少し荷が重くなったようだ。今日の予定地、唐松岳を目指して、まず稜線に出る。今日は代わってトツプは小生が務める。空身で白馬を往復、今日の行程はここから真南に約十一km。この山行の最北端・白馬岳に立って、いよいよこれから縦走へ入る。遥か南で一瞬霧がそれ、二つコブの鹿島槍がその雄姿を現すと、思わずファイトがみなぎってくる。かたつむりのように黙々と歩くが、すぐばてる。相変わらず昨日と同じようにガスがかかっており、視界は利かない。張り切ろうと思っても知らず知らずのうちにファイトをそがれる。この辺りは、這え松もあまり見られない。赤茶けた砂道の尾根であるが、登り降りが激しい。杓子岳は中腹を西に巻いて大きく下る。ここで昨日隣りに天張っていた松本深志高校山岳部員に追いついたが、他には人影は唯一つとして見えない。

次いで白馬鑓への登りにかかる。白馬鑓を下って鑓温泉への下り道のあるコルに出ると四人ともいささかダレ気味で、ばてたような顔をしている。「鑓温泉へ浸かって日の出でも拝もうか？」などと勝手放題のことを言い出す。まだ行程は五分の一にもなっていない。晴れていれば、この辺りから西には剣・立山連峰の素晴らしい眺望を始めとして、雄大な北アの全貌を望めるのであるが、今日ばかりはほんの光も見えない。何となく肌寒い天候では登行意欲も鈍ってくる。せいぜい助かるのは、この水不足の尾根で一向に喉がかわかないことだけだ。

このコルからややゆるい登りを登っていくと天狗の池だ。あまりきれいな水ではないけれど補給してしばらくは平らな道を行く。ここから少し登ると天狗の鎖、天狗の大下りと云われるザラザラしたジグザグ道を大腿で駆け下る。「不帰」と云われる高名な難関・不帰岳も霧のためにどの辺りだかほとんど見当がつかない。もうそろそろ不帰ではないかと思つてやや緊張しすぎて笑えぬ一コマもあった。下りの岩場にさしかかった時、濃霧のためすぐ傍に稜線があるのにも気がつかずに、そこを下ってしまったが、途中でホールド、足場もなくなり大きなザックを背負って進むに進めず、退くにも退けず流石に進退窮まってしまった。「かあちゃん、おれ死ぐのいやだ」と内心神頼み。幸いセカンドについていた情に厚くて女に弱い、男の中の男一匹、その名は船橋組の伊藤親分がザックだけ引き上げてくれたので、何とか危機を切り抜けたが、冷や汗ものだった。

やがて、不帰一峰とのコルに下りつく。ここで小休止。四人ともいささか疲れているうえに、気を遣うので参っている。気が荒立っていて一寸したことにも難癖をつけやがる。五十円の羊羹を買ってきたら、どうして百円のを買ってこなかったとくる。買出しも中々楽じゃない。五十円の羊羹が二個あれば百円分になるのが分らないのだから、どうも山に登る連中は大脳のネジが少し緩んでいるらしい。

一般には、不帰一峰、二峰、三峰と区別され、一峰・二峰間が最悪場とされている。我々も極度の緊張と冷静さを保ちながら、針金やアングルを伝わってゆっくりに進んで行った。ガスがかかっているので方向が定かでないため、新・旧道の二筋の道がある地点では一人が斥候になって偵察に行く。その間残った三人は横着を決め込んで腰を下ろして待っている。小生はこの斥候を一度も務めなかった。霧も風まじりの小雨状になり身に沁みる。空もどんよりとしている。この辺りには我々四人しかないのだと痛切に感じられる。

極度に必要以上の緊張が我々を参らせるとともに我々の足をも遅らせる。二、三ヶ所丸太を渡した場所では足元下の絶壁を見れば、つい緊張して足に細心の注意を払う。更に針金を手探るのだから、そういう場所を一ヶ所通過するたびにほっとする。次第に日も暮れてくるようだ。唐松に急がねばならない。二峰から三峰までの間に三つのゴブがあり、その一つひとつを越すのに四苦八苦していたのではテントはいつ張れるか判らない。黄昏も迫ってきたのに、相変わらず同じようなゴブの登り降りが続く。

福知がビヴァークの場所を探した方が良さだろうと提案したので、キャンプ地を物色しながら歩けども尾根道なので風が強く、適当なテントサイトがない。その内についに暗くなってきたので、これ以上進むのは危険と判断して唐松沢の上に風をさけてテントを張ることにした。まず最悪のテント地だ。どうやら風は凌げそうだが、傾斜しているし、狭くて充分にテントを張れない。腹もへっていたので食事をとり早々にテントの中に入り込む。遅くなつてついに雨になった。溝も掘ってない傾斜地では頭上から水は石が流れ落ちてくる。今晚は熟睡できそうもない。とにかく「疲れた」の一語に尽きる。

四日、昨晩はひどかった。動くのも大儀だが、ぼつぼつ動作を開始する。三人は廣瀬が持ってきた特大の葉巻を毎日少しずつ吸っている。

昨日予定通りいかなかったので、今日はこれからどうなるか判らない。九時にテントをたたみ直ぐ登りにかかる。約二十分ばかり登るとそこが唐松岳の頂上だった。頂上から緩やかに下ったところに唐松小屋がある。ここで少々休んでこの先の対策を練る。天気は相変わらず雨交じりの曇天に、小屋の主人に聞くと台風の心配はないというし、ラジオも荒れる心配はないということだったので、今日は五竜泊りに決めた。依然として景色が見えないのが惜しい。どうも昨日から歯痛に悩まされている。それも気が向かないひとつかも知れない。

昼ごろ、五竜へ向けて発ったが、この先の水不足を十分に知りすぎているために、清水が湧きでている場所で水補給を行っている最中に予期していなかったアクシデントが起きた。福知が不用意にも道端においておいた彼のキスリングが、突然西側へ転がり落ちたのだ。落石を伴ってザックは三転四転して大きく宙に舞いながら谷へ落ちていった。差してあったピッケルも、途中でシャフトが折れ跳ね飛ばされた。見ていた我々はしばし呆気にとられていたが、福知がすぐ谷へザックを探しに下って行った。とんだ障害ができてしまった。まずかなりの時間をロスすることは想像に難くない。

しばらくして漸くザックを見つけたと言って、下の方から福知がそろそろ登って来た。それから折れたピッケルを探し、それよりも我々が心配していた以上のことが起こっていた。ザックの中の石油缶が、転がり落ちる途中で岩にぶつかり穴が開いて石油がもれてしまったことだ。この先の行程では、水不足はもとより燃料不足は大変だ。そのことは充分承知していたのだ。

今その燃料であるガソリンを流してしまつたら、この先の山行は続けられない。水不足をカバーしようとしたことから、もう一方の燃料を失ってしまったのだ。

またしても四巨頭会談。

出された結論が今なら八方尾根を下れる。残念だが今回は天候も悪かつたし、運が悪かつたと諦めてまた来年やり直そうということまで下山に決まった。こうなつたらやけくそだ。残った食料も食ってしまえとその場で缶詰類を平らげてしまった。後ろ髪を引かれながら八方尾根を下り始める。一時間ばかり下つてくるとシャクに障ることに空が明るくなってきた。残念ながら引き返すわけにはいかない。予定の下山日まではまだ日があるのだし、燃料と水場のある絶好のテント地があったら幕営しようと言っていた時、ちょうど格好のテント場が見つかった。ルートからやや外れた所で小さなカールの底で、周りはお花畑で雪渓もあり他に二つのパーティもテントを張っている。この辺りまで下つてくるとガスが切れていて下界の景色が一望に見下せる。しかしながら、依然として後立山の上空には雲がかかっており、恐らく昨日と同じ天候なのだろう。夕方になって小雨がぱらついてきた。最後の晩餐としてマカロニサラダや腕によりをかけて作った料理に舌づつみをつつ。ここは寝心地が良さそうだし、今夜はぐっすり眠れそうだ。

五日、朝から雨が降っている。他のパーティも撤収できないようだ。雨の止むまでしばし待とうとテントの中で週刊誌を読みふける。遅い朝食をとって小雨になったのを見計らい十一時テントを撤収して雨具を身につけた。今日は八方尾根を下るだけだ。

靴ずれをおこしたらしく足の調子が悪くペースは落ちる。なんとなく霞んだ夢幻的な雰囲気の中を雨に打たれながらゆっくり下る。時折振り返っては不帰岳のあの厳然とした峻険な様相にしばし感慨に打たれる。

大きなケルンを一つ二つ見ると黒菱も間近い。映画でみたチベット方面の神靈的なケルンを想い出す。この辺りから数多くのパーティに行き交うようになり木々も多くなる。三月にスキーで来たことのある兎平ももうすぐだ。足をとられながらも八方山荘に辿り着いた。

ここで水泳千五百米決勝で日本の山中毅(早大)が四着に落ち、オーストラリアのジョン・コンラッズが優勝したとの報を耳にする。カックンだ。

さて、また議論だ。議題はロープウェイに乗って下るべきか、歩いて下るべきか。山荘のおかみに聞いたら、下りも百いくらかかるとの話。「馬鹿馬鹿しい。歩こう」でこの会議もチョン。ところが、この下り道が意外に難所だ。やや甘く見すぎたようだ。頭上を後から下ってくるゴンドラがどんどん我々を追い抜いていく。窓から、乗っている連中が軽く手を振る。「コンチクショー！」我々を取り巻く草木は我々の丈より高く、雨でしっとりしていてスリッパしやすい。何度尻もちをついたか覚えがないほどだ。シャクに障るとばかりに、雨具を尻に敷いて滑り台にして滑る。いやはや苦行だ。漸くのこと細野へたどりついたらバスが出たばかりで信濃四谷駅までテクる。夕方駅前には、びしょ濡れになった目玉だけぎよろつかせた人相の悪い四人組の男がぬっと現れた。

.....

ここで我々の失敗山行は終る。景色を見ることもできなくて、目的の半分も達成できず残念やるかたない。

結果的には、燃料を失ってしまったことが失敗の一因である。

しかし、その他にも時期の選択もまずかった。準備も足りなかった等、いろいろ反省すべき点がある。これらを今後の良い教訓として捲土重来、来年一九六一年には今一度、後立山連峰に挑んでみたいと思っている。